
オタクな彼女！

川野ながれ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

オタクな彼女！

【Nコード】

N3352A

【作者名】

川野ながれ

【あらすじ】

中学2年生の翔クンに彼女ができた！！デートに誘っけど断られて・・・！？

オタクな彼女！

オタクな彼女！

オレの名前は小林翔。「しょう」じゃなくて「かける」だ。2年6組サッカー部の期待の補欠。

最近かなり嬉しいことがあった。ずばり・・・彼女ができた！！
イエイ・イエーイ！！

彼女いない暦14年（11年齢）だったオレがつい3日前、校舎裏に呼び出され・・・この先は自分の胸だけにしまっておこう。誰にも話したくないほどうれいんだよっ！

しかも彼女はむっちゃんかわいい。めっちゃんじゃなくて、むっちゃんだ。

名前は星野愛梨。隣の5組。アニメみたいな名前んだけど、マジ、アニメの主人公みたいにかわいい！色白でさあ、髪の毛が栗色のセミロングで、目がおつきくて、背だつて低めで、まん丸の眼鏡はちょっと似合わないけど、とにかく好みのタイプだし、かわいいんだ！！ひゃっほーう！！

今日もオレは星野と帰るんだ。ホントは「愛梨」って呼びたいけど、まだ付き合つて3日だからキスもしてない・・・

でも！今日はがんばつて手をつなぐところまではいつてやる！！

・・・つないでる・・・。ヤバ、あつたかいし、やわらかい・・・。

俺の手汗ばんでないかな・・・。・・・なんかすげえ癒される。

こころぽっかぽか。・・・これが、愛・・・かあ・・・。

「今日の給食カレーだったねえ」

「え！？あ、う、うん！星野カレー好き？」

「うん、好き！小林くんは？」

御主何故そのようなかわゆい瞳で見つめてくるのじゃ・・・！！し

かもその甘つたるい声がツボる！！

だがオレも大人。冷静に受け流す。・・・てか、カップルの会話つてこんなもんなのか？こんなんでいいのかなあ・・・？もつと、こつ、「愛してるぜ」「わたしも・・・」「君のためなら、世界中を敵に回したつて構わない・・・！」「ステキ・・・」「ステキだ・・・」「みたいな会話が毎回繰り返されるものかと・・・。まあ、オレも星野も初カレカノだしその内言つようになるかな。

そつだ！デートに誘おう！！そつして親密になれば・・・！

「星野！！日曜ひま！？」

日曜なら部活ないし！

「えつ！？カレは！？・・・えつ・・・」

この反応は・・・ダメ？英語で言つと「well, , ,」。・・・つて訳してる場合じゃねえつ！押さねば！！

「2人で遊びに行こつよ！！」

「ごめん」

え、即答？

「あ・・・そつ・・・都合悪かつた？」

「あ、えつと・・・あの・・・誰にも言わない？」

もじもじしてるのカワツ！この時点で許してるけどオレはあえて怒つてる顔で星野に耳を近づけた。

「・・・バイトあるの・・・」

星野はオレの耳に唇を寄せることなく小さい声で言つた。ちよつとがつかり。

「・・・バイト？つてあのアルバイト？？え、中学生だよね？」

「学校に内緒で・・・」

星野はうなずいた。

「・・・あつ、そつなんだ。うん。じゃあがんばつて。じゃあな！」

「言わないでね！」

「もち！」

もちろん言つつもりなんか毛頭ない。アイ・ラブ・ホシノを守る

ため！オレは学校を敵に回したって構わない！・・・あ！このセリフは・・・

・・・バイト先聞いとけばよかった・・・。見にもいけねえ。ひま・・・。

そんなときになる電話。友達でありますよ〜に！セールスだったら般若信教を唱えてやる。

<もしもし翔？オレ、オレだけど！>

オレオレ詐欺じゃん・・・

「拓也？なに？」

<ひま？ひまだろ！>

「うつせー！そのとおりだよ！」

<じゃあさ、秋葉原行かね？>

「はあ？？おまえその道に走ったのか？」

<ばっか、んなわけねえだろ。でもさあ、一回行ってみたくな？・・・

・実はさあ、そこにあるメイド喫茶のちらし拾ったんだよ！>

「道に落ちてるもん拾うなよ！！！」

<まあ、とにかく・・・行かない？どうせひまだろ？だったら日本の新境地に行ってみよーよ！>

・・・確かに、ちよつと行ってみたい気もする。

「・・・行くっ！」

オタクな彼女！

来た。・・・すげえ！オタクだオタクだ！！眼鏡かけてるし！リユックしよってるし！ドラマで見たのがいっぱいいる！！うおっ、あいつコスプレしてるよ！

「・・・オ、オレらすげえとこに来たなあ・・・」

あの拓也が引いてる・・・。

オタクな彼女！

「あ、ああ・・・」

「きつと人はオレラのこと冒険者って呼ぶぜ・・・」

「名前にひねりが無いけど・・・多分そうなるだろうな・・・」

メイド喫茶は、メイド喫茶だった。いや、なんていうか、頭にフリフリつけたフリフリのエプロンつけた子がいた。やけにかわいこぶりっこした声で外に歩く人を中へと誘う。こういうのを「萌え系」とかいうんだろうか・・・。

「・・・いくか、翔・・・!!」

「え、やだ。もういいじゃん」

「男になるんだ!」

メイドたちはオタクっぽい人ばかり声をかけていたから逆にオレたちが入っていくと驚いた顔で見してきた。

中は・・・うわあ・・・。やはりここは新境地だった。

「いらっしやいませえ! 2名様ですね!!」
さっそく。

・・・やっぱ帰ろう・・・。オレと拓也は一瞬で通じ合い、後ろでオレ達の答えを待っているメイドを振り返った。

・・・え???

「・・・あれ? 小林くん??」

「!!!!??」

気がつけば、オレは拓也を引きずりながら、秋葉原を後にしていた。

・・・まちがいない、カナ?

あれは・・・星野だった、カナ?

・・・星野だよ・・・。星野がメイド服で・・・。

あれがバイトかよ!!

・・・ってことはもしかして星野はあっちの人間??!!・・・い

や、きつとおうちの家計が厳しいんだ……。だからしょうがなしにあんなところで……。うん。そうだ。

これから星野と帰るし、詳しいこと聞けばいいよな。

「小林くんもああいうところいくなだね！あたしもなんだあ！バイト以外でもよく行くの！！」

……。

「え……。い、いや、オ、オレはたまたま……」

「あ、そうなんだあ……。じゃあ今度2人で行こうよ！！あたし、案内してあげる！！」

かわいい。なんか、すごい生き生きしてる……。これがあの道の会話じゃなかったら……。っ！！

「星野、アニメとか好きなの……。？」

「うん！大好き！！」

「大好き」か。オレもまだ言われたことなかったのに……。

「もう、物心ついたときからアニメ見ててね、離れられない！！。だから校則違反でバイトしてたの」

「へ、へえ……」

考えてみれば、星野は結構、アニメの住人だ。姿かたちはもちろん、眼鏡もまん丸ってアニメぐらい？声も声優みたいだし……。これで髪や目の色が赤とか青とかだったらそのままテレビに入れてもだいじょぶそう。もしそんな星野がテレビに現れたらオレは真っ先にスイッチを切るが。

「……でも星野、まえ、服作りが好きって言ってたけど……まさか。」

「うん、それも好きだよ！アニメのキャラが着てる服を自分で作ってるの！買えたらいちばんんだけど、お金ないから……。だからバイトしてるんだけどね！！ほかにもフィギアとかCDとか同人誌とか欲しいし！！」

そう得意げに語る星野はとてもかわいかった。・・・同人誌つてなに？

「でもバイトの仕事も好きなんだあ・・・。友達・・・っていうよ
り、同士かな？そんな人たちがいっぱい見れて。情報交換もできる
し！！」

「・・・・・・・・」

これは、末期か？病院に・・・それとも保健室？？心の教室？？
今ならまだメンタルケアに詳しい大谷先生もいるだろうし。

・・・さてよ・・・。確かに星野はオタクだが、星野は現実世界
の俺にほれてんだ。・・・ほれてる・・・いい響きだ。っじゃなく
て！・・・だつたらまだ救えるものがあるんじゃない？

「星野！！」

「??？」

「オレのこと好きになった・・・その・・・きつかけを教えて欲し
いんだけど・・・！！」

「え・・・」

とたん、星野は真っ赤になった。よし、普通の女の子だ。その時
点でオレはほつとし、満足だったが、この際聞いてみるのもいい。

「・・・えつと・・・入学式のひとめぼれだっただけだね・・・」
恥ずかしさからかだんだんと小さくなっていく星野の声。

入学式・・・一年以上前から星野はオレのことを・・・！

「小林くんて、起動戦士ガンタロウにでてくるアコムそっくりなの
・・・っ！！」

・・・末期だ。

ダメだ・・・別れよう・・・。オレには彼女は無理だ・・・。

「あ、あの・・・星野・・・。オレさあ、そういうの興味ないって
いうか、苦手っていうか・・・だから・・・」

「あ、じゃあ、あたしがいろいろ教えてあげる！」

「へ??？」

「ビデオとか、DVDとか、いっぱい持ってるし、一緒に秋葉原ま

で遊びに行こうよお！」

おねだりするようにそう言いながら星野はオレの服の袖を引つ張った。

「こ、こんな積極的なのって初めてっ！！」

「で、でも……」

「ね？小林くんも好きになるうよ……」

下から熱い視線で覗き込んでくる大きな瞳。

……ダメだ……。

「……じゃ、ちよっとは努力してみるよ……」

すごく嬉しそうな星野。心の中では「同士が増えた！」と叫んでいることだろう……。

オレは気づかれないようにため息をついた。

結局、オレもある種オタクだったのかも……。

星野愛梨オタク。

それが、つないだ手の間で思うことだった。

オタクな彼女！

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3352a/>

オタクな彼女！

2008年11月7日07時44分発行